



Title : 雪の夜に本を読む幸せ

元日、犬の散歩の途中で雪寄せ中のW先生に会いました。元美術教師で大館少年自然の家の所長も務められた、多趣味な方です。息子さんはアメリカ西海岸に、娘さんはフランスに住んでいるW先生、後ほどいただいた葉書では、時折彼の地を訪れては美術や音楽に触れるという、羨ましい悠々自適ぶりです。心豊かな人生の先輩に励まされて、久々に気持ちの晴れる思いをしました。

❖ EXILEと樹海ドーム

小学館発行の週刊誌「女性セブン1月22日号」（1月8日発売）に、『EXILE伝説 体脂肪率2ケタでデブ扱い、億単位の規模のリハ』というちょっと気になるタイトルの記事が。

——全国ツアーの前には、秋田県にある大館樹海ドームを借り、1か月かけてリハーサルを行うのが恒例だ。「リハーサルでも、わざわざ本番と同じセットを組んで、本番と同じ状態で行うんです。大がかりなセットなため、リハでも億単位の費用がかかるんですが、EXILEはライブを何よりも大切にしているグループですから、そこに妥協はないんです」（音楽関係者）

案の定樹海ドームの名前が出ていました。文教振興事業団つながりで、ドームや文化会館は何かと気になるのです。樹海ドームでのリハが1か月に及ぶととられそうな文面で問題ありですが。文中の「恒例」というのも、毎年関係者がギリギリの思いをして日程を確保しているわけで、次の年も約束されているわけではありませんし。それでも、商業誌に名前が出てくるというのは樹海ドームならではと言えます。

ここまで書いたら、本来は図書館資料へと誘導するのが当コラムの本筋というのですが、残念ながら市立図書館では女性セブンは購入していません、悪しからず。

❖ 伊集院静の美術エッセイ

年末に読んだ本から1冊紹介したいと思います。伊集院静『旅だから出逢えた言葉』（小学館、2013年3月発行、田代図書館所蔵）です。

伊集院静と言えば、売れっ子CMディレクターから小説家に転じ、夏目雅子や篠ひろ子と結婚しと華やかな経歴で有名です。ギャンブルやケンカに明け暮れる日々を過ごしたことも。また、長嶋茂雄から直接立教大学進学を勧められて立教の野球部に所属したこともよく知られて、いるでしょうか。

実は伊集院氏、元々は美術大学進学を目指していたそうです。週刊ポストに98年から連載した「美の旅人」では、スペインやフランスへ名画を巡る旅を続け、同名の立派な単行本にまとめられています（『美の旅人』小学館、2005年5月、中央図書館に所蔵あり）。

『旅だから出逢えた言葉』は、ヨーロッパ各地で、自宅のある仙台で、旅（あるいは人生）の途次で出逢った言葉、人、風景や音を語ったエッセイです。キリスト者である奥さんとの生活から、無神者である氏がキリスト教へのまなざしを変えつつある様子も興味深いですが、とにかく無性にその土地に立ち、絵が見たくなる、そんな思いを抱かせる極上の読書体験でした。引用を二つだけ。

——美術館とは不思議な世界である。そこに足を踏み入れた途端、現在の時間は止まり、ゆっくりと過去が寄せてくる。人間の中に、美を求める心があり、それがゆたかなことであることを証明してくれる場所なのだから。（205頁）

——（スコットランドのゴルフ場でアルバイトの）キャディーと別れる時に、私は質問した。「この町にはいつか帰るのかい？」「はい。故郷は帰る場所ですから」（161頁）

今回はW先生に触発された内容になってしまいました。我らが故郷は雪にほとんど悩まされるこの冬ですが、皆さまどうぞお元気で。今年も市立図書館をよろしくお願いたします。1月28日（水）11時から恒例の「図書館でホッとタイム」開催します。13時から落語も聴けるみたいですよ。（陽）